

だいせつざんのすがお

大雪山の素顔

山岳ガイド、旭岳ビジターセンター、自然解説員などで活躍する人たちをリレーしています。高山植物、紅葉、雪、動物など「自然の大博物館」といわれる大雪山の素顔が見えてきます。

“八方ふさがり”の登山道

「大雪山は登山道が整備されていない」と、本州から来られたお客さんによく言われる。しっかり整備されて迷う心配もない本州の「百名山」コースばかり歩いていたなら、大雪山の登山道が良くないと感じるのは当然かもしれない。

本州の登山道が歩きやすいのは、山小屋が登山道を整備しているからだ。ヘリコプターによる荷揚げが一般的ではなかった時代、山小屋に物資を運ぶのは人力が頼りだった。そのため登山道は、登山者が歩くだけではなく、山小屋にとっては「生活の道」でもあったし、「道が悪い」という悪評が立てばお客離れも進むので、「道直し」は山小屋の重要な仕事の一部になっている。

ところが大雪山では、前回述べたように、営業目的の山小屋が一軒しかない。そのため、国内最大22・6万ヘクタールの面積を誇る大雪山国立公園の登山道整備は、行政



崩落した登山道（昨年9月、中岳分岐付近）

の手に委ねられている。もちろん行政もそれなりに努力はしているのだが、弱小官庁の環境省（失礼！）や、巨額の債務にあえぐわが北海道では、登山道整備に回すおカネや人材は限られてしまう。下手をすると行政仕分けの対象になりかねないで時世でもある。野球やサッカーのように大きなおカネが動くことのない登山のような営為には、日本の行政は基本的に冷淡だ。ハッ場ダムに使うおカネはあっても、登山道整備におカネを出すなど論外なのかもしれない。

悪い話はさらに続く。一昨年、去年と続いた洪水災害で、主要な登山口へつながる林道が数力寸断され、いまだに復旧されていない林道もいくつかある。

▼ 森林管理署にしてみれば、施業計画（木を切る予定）のない林道を修復しても意味がない、ということになるが、登山者にとっては、登山口へ行きつく手前で門前払いを食った形だ。この状況を放置すると、登山者の減少が今後とも続くことが懸念される。

残念ながら、気候変動によると思われる集中豪雨傾向はここ数年顕著になってきており、登山道も林道もあちこち傷だらけ、まさに「八方ふさがり」の状況だ。大雪山は受難の時代に入ったと言っていだろう。

山樂舎BEAR代表 佐久間 弘

俳句



除雪車の戦車のごとく走り去る	ひとり来て神に一礼息白し	八十の新年うれし屠蘇よろし	厳寒のまつり準備の熱い息	ジョンバとふ雪掻きありし少年期	ぼたん雪ゆるやかな時刻まれる	懐かしや「趣味は雪掻き」父の声	雪掻きや隣の店主も連れとなり	地吹雪の闇走りゆく孤独かな	師走の日傘寿の記念妻と撮る	雪掻いてるる音の寝覚め急き出る	雑念の消えては生れし女正月	若水の九リットルを備えけり
秋山深雪	三島智	松山蓉子	澤田久美子	石澤清宏	高瀬潤	山口佐知子	杉山りつ	徳光吐苦	杉山ひろのり	青野公花	小林ろば	長谷川きみゑ